

可能性とつそぶきと

— グスコープドリのなかにホレイシヨ—

秋山 康文

二〇〇二年十二月二十八日に行われた第五回原爆文学研究会では、「もどかしさ」をめぐるやりとりがなされる場面があった。まず、フロアから（といっても毎回会場には壇上も壇の下もないのであるが）ある発表者に対して、今回発表者が採ったような言説には、ある種の言葉が届かないのだ、それが「もどかしい」、という感慨が漏らされた。それを受けて発表者は、自分の言説がいかに人々に届きにくいかという「もどかしさ」について語り始めた。つまり、両者の「もどかしさ」はすれ違ってしまったのだが、それを聞いていて私も「もどかしさ」を感じたのであった。そんな訳で、という訳でもないのだが、今回は「もどかしさ」について書いてみたいと思う。

それは、時の立つのが遅い日だった

そして太陽は、道端に立っている兵士達を叩きつづけていた
まぶしい光があった

店の窓ガラスは粉みじんになる

爆弾はベビーカーの中にあつて、無線受信機に繋がれていた

これは、ポール・サイモン (Paul Simon) のアルバム「グレイスランド (GraceLand)」の冒頭の曲『ザ・ボーイ・イン・ザ・バブル (The Boy in the Bubble)』の冒頭である訳詞は引用者。「グレイスランド」は、当時ブロック政策が適用されていた南アフリカ共和国のミュージシャン達と協力して作り上げられたアルバムで、そのことが自身が賛否両論、物議を醸した。一九八六年グラミー賞受賞。

解釈は少し先に延ばすことにして、もう少し、この曲に描かれる世界をたどっておきたい。

乾いた風が吹いていた

そしてその風はその砂漠を吹き渡り

そしてその風は、カールしながら生の円環へと吹き込んだ

そして死んだ砂は、子供達やその母やその父のうえに

それから全自動の地球のうえに、降っている

(二番より)

振り向き回転ジャンプショット

どの人もみなジャンプスタート

どの世代もみなポップチャートにヒーローを投げあげる

薬は魔術で魔術はアートで

あぶく (the bubble) の中の少年 (the boy)

そして野蛮な心 (the baboon heart) の赤ん坊 (the baby)

(三番より)

全自動の無機物と化した地球の上で、平準化された全自動の人

間違が、赤ん坊の心をも野蠻にする。

このような語り方は、あまりに紋切り型に過ぎるということも出来ようし、また、あまりに結論を急ぎすぎていて、あるはずの可能性を見たいのではないかという反論もまたあり得よう。

しかし、「Bubble」という語が、「あぶく」や「夢のような計画」といったことだけでなく、「戦闘機の円蓋・風防 (canopy)」のことも指し示すということを考え合わせると、この表現はこの表現で、戦争状態を再生産していく命の形に対する一つの比喩として、それなりの力を持つているのだと思われてくる。

シャボンの中の赤ん坊と、夢の中で暮らす少年と、戦闘機のキヤノピーの中の少年と、それから野蠻な心の赤ん坊とが、どうしても重ね合わされてしまうという一つのイメージ。多少の誇張は伴っているのかもしれないがしかしこのイメージは、戦争というものに対する私たちが持つ不安の一面面を、確かに先取りしているのだということはできないだろうか。

もう一度目を冒頭へ転ずれば、叩きつける (beating) 太陽の日差しと閃光 (a bright light) の中で、野蠻な心 (the baboon heart) の赤ん坊 (the baby) は、ベビーカー (the baby carriage) の中で爆弾 (the bomb) となりおおせ、かくて無機的で全自動の生の円環 (the circle of birth) は、その姿を全うするのである。ここにあるのは、本質的本来的に生きることを放棄し、命を滅することのみを目的とした命の誕生。もしくは、命を滅する命という、完璧な全自動装置の誕生。完璧な自爆兵器の誕生。

この比喩による描写の喚起力に、例えばブーイング (boing) でもって答えてみても、喚起されたイメージに対する嫌悪の情を

かきたてることは出来ても、不安を消すことは出来ない。

さてポール・サイモンは、このように描き出した世界に、自ら次のように歌いかける。

ちかごろは奇跡と驚異の日々

それは長距離電話

カメラがスローモーションで僕たちを追いかけるように

僕たちが、僕たちみを見守るように

僕たちが、

空のすみっこで死にそうになつて

遠くの星座を見守るように

ちかごろは奇跡と驚異の日々

だから泣かないで baby 泣かないで

泣かないで

私は、ここに並べられているものたちは、みな「もどかしさ」を持つているものたちなのだ、いつの頃からか思うようになった。

そして「もどかしさ」とは、可能性に通じるものであると私は思う。「可能性」とは、例えば、子供の頃、冬の日、こたつの中で、足の指で靴下を脱ごうとした時の、あの感覚（私自身は今では、五本指ソックスを履いていることもあって、そんなことは朝飯前のラクチンチンであります）。

しかしそれでは、「ちかごろ」の「奇跡と驚異」、すなわち、ジャンルに情報 (staccato signals of constant information) を伝えるた

めのレーザーを光らせるようなテクノロジーと、それによって作られる金持ちたちの（ゆるやかで自由な／不確実な）友好関係（*loose affiliation of millionaires and billionaires*）とが、はたして、この円環を断ち切ることができるのかどうか、シャボンの中からそのまま外へと出ることなしにキャノピーへと収まっていくという命の流れを断ち切ることができるのか、どうか。

この円環を断ち切ろうとしても、その流れはあまりにも必然的閉鎖的に感じられてしまつて、その前で私たちはいつも立ちつくしてしまつていゝのではないか。そしてそこにあるのは「不可能性」のみなのであつて、「可能性」も感じるすきまなどどこにもないのではないか。あるいはほのかに感じられた「可能性」に触発されてとつた行動が失敗し、かえつて自分の「不可能性」を深めるのみなのではないか。そして、このようにして私たち自身も、結局、不安と「不可能性」とを自らの「錘」として、無機的で殺伐とした生の円環の渦の中へと、「カールしながら」巻き込まれ、沈み込んでいつてしまふのではないか。

と、ここまで書いてきたところで私は、（現在の世界とは、私たちにこのような不安と「不可能性」とを必然的にもたらしてしまふ不完全な世界なのだ）という定義を下すことを、一端棚上げして置かなければならないだろう。なぜならば、たとえば、精神的な立場から考えれば、不安とは、自分の思うようにはならない自分自身のエネルギー・欲求・欲望に対して自分が持つ無力感・情動のことなのだから。不安に対する考察は、自分を不安にさせるものは外的な対象としての世界なのではなく、自分自身の中のものから出発しなければならない。

い、ということになる。世界の姿を語る前に、そのように世界を語りたがる自分の欲望にまなざしを向けておきたい。

八月になるたびに

“広島―ヒロシマ”の名のもとに

平和を唱えるこの国

アジアに何を償つてきた

おれ達が組み立てた車が

アジアのどこかの街角で

焼かれるニュースを見た

今日も Hard rain is falling.

心に Hard rain is falling.

子供等の肩をうつ

飢えてゆく すさんでゆく

明日への希望など持てないまま

これは浜田省吾のアルバム「J. BOY」（一九八六年）に収録されている『八月の歌』の二番である。今ここでは私は、補償にまつわる問題や経済格差の問題、国と個人との関係性の問題、それから「アジア」や「子供」といった代理表象にまつわる問題、そういったことについて云々しようとは思わない。ただ、そのような言説をとまなつて表出されるある種の「すさみ」の存在について、注目しておきたいのである。歌詞は以下のように続く。

満たされぬ想い

この からまりの怒り

八月の朝は ひどく悲しすぎる

No winner. No loser. ツール無き闘いに

疲れて あきらめて やがて痛みも麻痺して

Mad love. Desire. 狂気が発火する

暑さのせこや

暑さのせこさ

今日も Hard rain is falling.

心に Hard rain is falling.

意味もなく年老いゆく

報われず 裏切られ

何ひとつ誇りを持ってないまま

ここには、他者へと何かを真摯に届けようとする思いそのものが、そのことの「不可能性」^{あきらめ}によって、自分を（そしてあるいは他者をも）焼き尽くす（爆弾）へと変わっていくさまが見て取れると、いいように思う。私たちの不安を生み出す、かつては確かに「love」であった（あるいはそうあろうとした）「mad love」という欲望。あるいは、被爆の体験の語り部の人々にあめ玉を投げつける少年たちの欲望。

さて、この歌の主人公は、「砂浜で戯れてる／焼けた肌の女の子達」を眺めながら「修理車を工場へ運んで渋滞の中」にいる勤労青年である（と思われる）のであるが、かくいう私自身は勤労青年でもなんでもなく、虚学に身をやつす、比較すれば観念過多

の青白い学生である。この距離を無視する訳にはいかないだろう。例えば私の中には、宮沢賢治『グスコープドリの伝記』の中で、グスコープドリが救った世界を、その後そのまま爆発させてしまいたい、という思いがある（もしもそんな映画が撮れるなら……）。そしてそんな欲望が、おそらく私を不安にさせる源のひとつなのであろう。

なにもグスコープドリの自己犠牲の真摯さに文句を付けようというのではない、のだと思う、と今は言っておこう。辺境からさらってきた彼一人の犠牲のみによって世界を救うことが出来るのだ、という御都合主義の幻想としかいいようのない物語を夢見るような世界そのものを壊してしまいたい、と私は思っている、ということなのだろうと思うのである。

かつて、自分は父の恨みを晴らすための人間なのだという自分に対する呪縛から逃れられなかったハムレットは、その復讐において自らを（爆弾）と化して果てたかのようにあるが、その復讐終わって親友の死を目の前にしたホレイシヨは、「無念でござる」とだけ言ったとか言わなかったとか（私が見た歌舞伎『葉武列土』では確かそうであったように思います）。

『ハムレット』にはホレイシヨがいて、彼は、私たちを「不可能性」^{あきらめ}の淵の中へ沈み込んでいってしまうことから、かろうじて守ってくれているが、しかしはたして、自分の親も妹も故郷もなくし、そして自分の命の自由もついに持つことができなかったグスコープドリの中にも、それでもまた一人のホレイシヨが息づいてくれているのであろうか。また、もし首尾よく私の（爆弾）が世界を爆発させることに成功したとして、はたしてそ

の後に、グスコープドリの中のホレイシヨは、首尾よく、「無念でござる」という言葉を産み落としてくれるのであろうか。

私はこうした〈不安〉を、単に私だけの内的世界の問題としてではなく、公的な世界認識の問題として扱いたいと思うし、扱っていただけたらと思う。なぜなら、グスコープドリの中にホレイシヨを望むような欲望は、私だけではなく、生き残りそしてなお生き続けようとする側の人間たちの御都合主義的横暴のようにも思われるからである。日々彼らを殺しつづけているのかもしれない私たちの。例えばもし、グスコープドリが世界に対して「さ」というとき、私たちはそれにどう答えればよいのだろうか。

ポール・サイモン『ザ・ボーイ・イン・ザ・バブル』の歌詞自体には、可能性の具体的な側面についての示唆はない。だから、「もどかしさ」を「可能性」とつなげることは、この歌の悪く言えばベテン、よく言えば賭なのだということになる。泣いているbabyを泣きやませるための。だって泣いていては、なにもできないのだから……。

だから、この歌自体が一つの「夢のような計画 (the bubble)」なのであり、うそぶきなのであり、この歌の歌い手もまた、バブルの中の少年なのだということになるのであろう。

おそらくこのポール・サイモンも、そのことにはなにかば自覚的なのではないかと私には思われる。なぜならこの曲最後のハミングは、立派なうそぶきのだから。

アコーディオンで奏でられ始めるオーブニングと、それに続く重く叩きつけられるドラムスとは、私にとっては、夏の暑く厚い

空気と照りつけ叩きつける日差しであり、また同時に、あの夏の街を歩く男の叩きつけるような足取りであり、また時に、爆弾の爆発であつたりもするようである。そして、この暑く重苦しい日差しの中の重苦しい足取りを、さらに続く彩りあるバンドの演奏は、確実に軽くし、前へと進むリズムと流れを作り出してくれているように私には感じられる。そしてその彩りとリズムと流れとが、うそぶきに息吹きを与え、アコーディオンに新たな活力を与えている（そしてアルバム「グレイスランド」は、軽快さときらめきを持つタイトルチューン『グレイスランド』へと滑らかにつながってゆきます）。

今や私は、もしかしたら戦争などしなくても、歩き続けることができるのかもしれない、と、夜、星を見て歩きながら夢想したりもする。なぜなら、戦争などしなくても、世界中いたるところで〈星座〉は、毎日毎日、夜でも昼でも、見えていても見えていなくても、死にかけてくれていいるからである。

もし僕の手が星々に届くなら……

エリック・クラプトン (Eric Clapton)

『チェンジ・ザ・ワールド (Change The World)』

あ、それよりなにより、爆弾のプラスチックの(?) スイッチを押したりするよりは、素手で叩キアイの方が、心地よいのだ、手応えが。タブン、ね(でも、あんまり痛すぎるのはキライです)。